令和５年度 第１０２回全国高校サッカー選手権大会 総評

報告者：高体連技術委員 細田学園高校 上田健爾

令和５年度第１０２回全国高校サッカー選手権大会が１２月２８日（開会式・開幕戦）から１月８日（決勝戦）の期間に開催された。優勝は青森山田高校（青森県)、準優勝に近江高校（滋賀県)、３位に市立船橋高校（千葉県）と堀越高校（東京都）という結果となった。決勝戦はプレミアリーグ優勝チームである青森山田高校と今大会旋風を起こし続けてきた近江高校の対戦となり３－１で青森山田が勝利し、２年ぶり４回目の栄冠に輝き、２冠を手にした。

（１）本県代表昌平高校の戦いぶり

本県代表の昌平高校は、1回戦奈良育英高校(奈良県)と対戦した。この日の戦いでは FW⑨小田と FW⑮鄭が同時に出場し、１－４－４－２の陣形でスタートした。ハイラインで守備を試みる相手に対して、２トップへのフィードで前線に起点を作る狙いが功を奏し、前半１１分に⑮が相手 DF ラインの背後に抜け出しゴール前まで運ぶと落ち着いて⑨にパスし無人のゴールに決め先制に成功する。その後も相手のプレスのベクトルをおり主導権を握ると、２５分 GK①佐々木のパントキックで前線に送り２トップで起点を作り、最後は⑨が相手 DF の裏にスルーパスを出し、左 MF⑦土谷が決めた。これ以上失点できない奈良育英高校は５バックの布陣で構えるが、３６分には MF⑩長が中盤からドリブルで抜け出しクロス、混戦を⑮が押し込み３点目を挙げ、前半を３－０で折り返す。後半も攻撃の手を休めず､後半から投入された MF⑪長や MF⑬西嶋がチャンスを作り､得点を重ね、最終的には７－０と攻撃力が爆発したゲームとなった。

２回戦はプレミアリーグ所属の米子北高校（鳥取県）との対戦。米子北高校は１－４－４－２のブロックを作り、昌平高校に中央を割らせずボールを奪い、２トップに素早くボールを送り、カウンターを仕掛けていく狙い。対して昌平高校は１回戦と同様２トップでスタート。左 MF⑦土谷が内側に立ち位置をとり、中盤中央の人数を増やし主導権を握ろうとする。前半は両者とも素早い切り替えと高い強度でお互いのやりたいことを消し合う展開となり、スコアレスで前半を終える。後半に入り、両 SB が攻撃参加し前線の人数が増え始めた米子北が圧力を強めていき徐々に主導権を握っていく。すると、４７分ロングスローからの混戦を米子北高校が押し込み先制し、ゲームが動く。追う昌平高校は切り札 MF⑬西嶋や MF⑥鈴木が入り得意の１－４－２－３－１の陣形で流れ変え、中央から⑩長、サイドから⑬西嶋や MF⑧大谷が個人技で仕掛けていくが、相手 GK の好セーブもあり得点を奪えない。しかし、再三に渡って掛け続けた攻撃が圧力となり、終了と思われたラストワンプレーについに執念が実る。右サイドからのクロ

スを途中出場の⑪長がヘディングで合わせ同点にし、ここで終了のホイッスル。PK 戦は５人中４人が決め、４―３で勝利した。

３回戦も注目のカードとなった。対する大津高校（熊本県）は１－４－４－２のブロックで硬い守備を構築し、サイドから FW の高さを活かした攻撃を仕掛ける。昌平高校は、⑬西嶋をスタートから起用し、１－４－２－３－１の陣形で相手のライン間に人数を増やし主導権を握り多彩に攻撃しかけていく。この日は両者がそれぞれの強みを出し、得点の奪い合いとなる。先に得点を奪ったのは大津高校。高めのクロスボールをヘディングで折り返しそれを押し込み先制。すぐさま昌平高校が相手ブロックの狭いスペースでボールを回し崩し⑨小田が決め追いつく。後半、またしても先行したのは大津高校。CK からヘディングで合わせての得点だった。昌平高校は次々に交代選手を送り攻撃の圧力を強めていく。迎えた７８分⑪長が中央突破からのこぼれ球を見事なボレーシュートを決め切り、２試合連続で終盤での同点劇を演じ、PK 戦に突入する。PK 戦では①佐々木の好セーブとキッカー５人が全員成功し勝利した。

準々決勝、国立をかけた一戦は、優勝候補の青森山田高校との対戦となった。試合は序盤から動き出さす。１分に CK のこぼれからクロスボールを合わせられ失点。３分フリーキックからフリーを作ってしまい連続で失点しまう。青森山田の圧力は収まらず、１９分にも失点しまさかの０－３になってしまう。追うしかない状況の中、ベンチが動く。前半から⑬西嶋と⑪長を投入し得点を奪いに行く。徐々に平常心を持ち直し、昌平らしさが出てくる中、チャンスも作り出したが得点は返せず０－３のまま前半を終える。後半は先に得点を奪いたかった昌平高校だったが、またしてもセットプレーから失点し４点を追う形になる。１点を返すべく、ボールを支配し相手の間をコンビネーションや個人技で突いていく攻撃を仕掛けていく。奪われても素早く切り替え攻守一体の昌平高校のサッカーを見せていく。しかし、青森山田のゴールを隠す守備は固く最後まで破ることができず、このまま０－４で敗れ、昌平高校の選手権は幕を閉じた。全国ベスト８という結果であったが、昌平高校の攻守一体の切り替えの速さ、狭いエリアを割っていくコンビネーション、高い個人技を十分に発揮した攻撃力は観客を魅了した。また、終了間際に劇的に追いついた試合が続いたが、これは決して偶然ではなく、次々に出てくる交代選手のクオリティーの高さやシステム変更が相手に圧力をかけ起こした結果である。改めて昌平高校の層に厚さを感じた大会となった。

（２）優勝校分析

優勝した青森山田高校は、初戦となった２回戦飯塚高校（福岡県）１－１PK 勝ち、３回戦広島国際学院高校(広島県)７－０、準々決勝昌平高校(埼玉県)４－０、準決勝市立船橋高校（千葉県）１－１PK 勝ち、決勝近江高校３－１で優勝を決めた。基本布陣は １－４－１－４－１ で、高い強度のプレスから相手陣内でのプレー時間を長くすること、ゴールを隠す守備、攻守にわたって主導権を握ること、そしてセットプレーの緻密さをゲームモデルと

していた。ボール保持時は DF もしくは GK から前線へ配球され、シンプルに早く前進し、相手陣内に侵入する。その際に、両ＳＢが高い位置を取り、攻撃の厚みを増やすことで、ボールを失っても素早くプレスをかけることを可能にし、相手コートでのプレー時間を長くするコンセプトを達成している。アタッキングサードでは、MF⑩柴田や MF⑭杉本が高い精度のキックでゴール前にクロスをあげチャンスを作り出す。そのクロスに対して FW⑪米谷が良いタイミングで動き出しゴールを生み出した。また、クロスボールのこぼれ球の回収が徹底されており、その回収から二次攻撃が生まれ、相手ゴールに迫る。非ボール保持時には、それぞれのエリアで守備コンセプトが徹底されていた。アタッキングサードでは連続したプレスで相手に考える時間とスペースを与えず、積極的にボールを奪いに行き、ミドルサードでは コンパクトなブロックを形成し、引き込んでボール奪う。自陣ではゴールを隠しながら体を張ったタイトな粘り強い守備を遂行し相手にシュートを打たせない。また、セットプレーからの得点も多く、高さを活かすのはもちろん、一人ひとりが入る場所やタイミングが徹底されており、青森山田の強さとなっている。

（３）大会全般の傾向について

今大会全般を振り返ると、全４７試合中１４試合が PK 戦での決着となり、拮抗した試合が多く見られ、地域差が詰まりつつある。これは、プレミアリーグや地域リーグの普及でコンスタントに試合が行われレベルが上がってきていると考えられる。

また、準優勝と躍進を見せた近江高校を筆頭に攻撃に特徴のあるチームが大会を彩った。しかしその一方で、守備の柔軟性に欠ける点が指摘されている。自チームのコンセプトに偏り、それが破られると崩壊してしまう。前線からプレスをかけるのか、ブロックを整え引き込むのかより柔軟に判断できることが今後さらに求められる。

おわりに

大会を通じて、声援も戻り熱量、活気の溢れる試合が多く見ることができた。１年間それぞれが置かれた環境で切磋琢磨し、鍛えられた成果が出ておりレベルが上がったと感じた。しかし、先にも述べた守備の柔軟性やそれぞれのプレーのクオリティなど、課題も見ることができた。

そして、埼玉県代表の昌平高校は全国大会においても質が高かった。素晴らしいゲームを見せてくれたことを称賛したい。さらに、埼玉から良い選手が育成できるよう各チーム切磋琢磨したい。